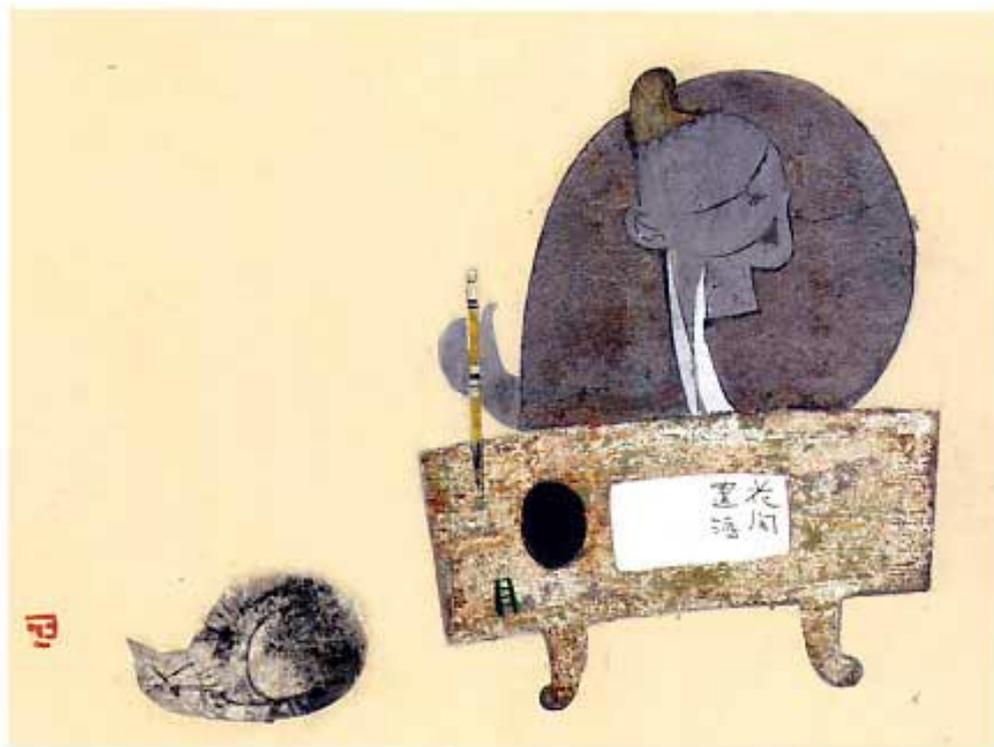


火星



平成20年10月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

つつ立つて八朔の嬰見下ろしぬ

真葛原ときをりとどく女ごゑ

水を出し家鴨に影や厄日なり

雨の日の仏壇にある栗の毬

出水ひきたる鶏頭の影なりし
まだ傘をさしゐる人や萩の原
担送車の大きな足裏秋の暮
末枯や夫の洗顔にぎはしき
鴨たちの渡りのころの素顔なる
初鴨の声や式台踏みしとき

太白星

柳生千枝子

眼で辿る天の川原乱るるか
天の川辿り寂しくなりにけり
眼で辿る銀河よ心寂しさよ
風の夜の銀河の白さ見てをりぬ
庭下駄を鳴らし夕顔もう一度
ががんぼを打ちて深夜の雨つのる
蝸のそれきりなりし別れかな

杉浦典子

まつ先に鏡のビルの灼けにけり
大阪のはづれに育ち祭鱧

金魚玉寄席提灯の点りけり
水蹴つて日向に出でしあめんぼう
くわんおんに背を向けて背の涼しかり
堂縁に足垂らしゐる涼しさよ
ぶつつかりくる汗くさき子のつむり

浜口高子

けりけりと声太りくる籠枕
抛られし鉾綱けものめきにけり
ほうたるのもつる下をひとり歩く
わだつみに風の干蛸灼けゐたり
リストラの話の外の心太
あやめに風宝物殿の開けられし
すつぽんの貌すぐ消えし土用風

火星作品

山尾玉藻選

登り来し汗真言を唱へけり
八幡 大山文子

鉄条網繕うてある土用の芽

突堤に足垂らしぬる浴衣かな

くわんおんに妻となりたる人の汗

ごきぶりの羽這うてゐるアスファルト

先達の櫛宜のよろけし茅の輪かな
神戸 深澤 鱻

七夕の天象儀てふ観て冷えし

鱧の皮あづま男を量りをり

山建てや黒松立ちて高からず

しんとぎやうさん刀田山に蟬の穴

日ざかりの蜘蛛の下りきし太子堂
八幡 奥田順子

その奥に不開の御門雲の峰

月影に締めなほしけり祭帯

ふくらみて月にはじけし踊の輪
豆腐屋の昼を灯せる土用入
七夕の田を見て来たる足洗ふ
わが影の中の金魚をすくひけり
声すぐに波にさらはる帰省かな
西日中母牛ながく鳴きにけり
二月堂にひと雨ありし草の市
カレー鍋河原に据ゆる大暑かな
せせらぎにふはりとのりし蛇の衣
禅堂のいろんな靴に蟬時雨
干梅の香の山影に入りゆけり
本堂へちつと鳴き飛ぶ油蟬
サングラス選ぶ鏡を選びけり
青空に梢そよげる夏の風邪
朝がたのプールの肩を猫あゆむ
小児科へ蟬を鳴かせて入りゆけり
松毬のあをあをとあり土用波

大和郡山
城
孝子

宝塚
山田美恵子

明石
戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

月影に締めなほしけり祭帯

奥田 順子

くわんおんに妻となりたる人の汗

大山 文字

極暑の中で行われた加古川鶴林寺吟行での一句である。鱧さんのお嬢さん玲奈さんが久しぶりに参加されたが、結婚されて一層美しくなっておられた。作者も同じ感慨であったのだろう。「妻となりたる人」はしばしば俳句の対象となるが、その「汗」に注目した点に独自性がある。この「汗」は爽やかなエロスの香る「汗」であり、観音さまの艶やかささえ褪せて感じる。「汗」の一字が一句に張りのある艶をもたらせた。

鱧の皮あづま男を量りをり

深澤 鱧

玲奈さんを伴って幸せそうな鱧さんであったが、ちよつとした悩みがあるらしい。玲奈さんのご主人が関東出身だからだろうか、彼のこころの程を少々はかり兼ねる様子である。こんな心象を関西人が親しむ「鱧の皮」に託し、アイロニーとペーソスが相まった面白い味が生じた。「鱧の皮」の俗と「あづま男」の雅の対比がさほど露わでないのが良い。

実は原句は「たけなはに締めなほしけり祭帯」であった。句会では「たけなは」の無用と具象性に欠ける点をアドバイスしたが、後に推敲されたものが掲句である。「祭帯」は単に文庫結びをするのが一般的で、余り人目を気遣うこともなく容易に結び直せる。帯を結び直す人影が月明の地に刻まれて、なんとも美しい祭の一景である。「月影」に突つ込みがあり、単なる事柄俳句ではなくなった。

声すぐに波にさらはる帰省かな

城 孝子

季語「帰省」が気分的に処理されることなく、張りのある一句となった。「荒波」のひびきに喜びが感じられ、古里の海への言祝ぎがある。

せせらぎにふはりとのりし蛇の衣

山田美恵子

この「蛇の衣」は水面の上に張った枝に掛かっていたのだろうか、それともどこからか風に吹かれてきたのだろうか。いずれにしても、「蛇の衣」が流れに落ちた瞬間を切り取った純粹な自然観照の句である。常套的修辭になりがちな「ふはり」ではあるが、この場合は「せせらぎ」と相乗し、その後の美しい情景を際やかなものにしてている。(以下略)

恒星圈

深澤 鱒

銀幕に雨降つてぬし巴里祭
天保山渡し短し生ビール
白鳳のほとけ涼しきくびれかな
石積んで湊の灼くる海津かな
金魚田の見えずなりたる青田かな

波田美智子

堀 志皋

髪ぬれて尾根わたりある夏の霧
父母や蠅取りりボン吊りし頃
子と呼びに出て美しき虹に会ふ
向日葵を厠に活けし次女の家
曾孫は女四人鉄線花

浜木綿や歩きすぎたる足と腰
サングラス妻の前にて外しけり
家の中に溜まりはじめし蟬の声
青鷺の覗く深夜の生簀かな
でで虫の眠る七夕竹なりし

廣畑 忠明

丸山 照子

洗鯉器に透きて並べらる
バス停のみな乗りゆきし蟬しぐれ
段畑に雨静かなり合歓の花
放課後の夕焼けてゐる大時計
縁先へ手酌の移る星まつり

菩提樹に寄りけり印南野の大暑
峰雲や血脈浮ける仁王尊
蟬声のにはかに九品来迎図
雉鳩の堂縁あるく朝曇
くわんおんの鈴の音ちかき円座かな

獅子座

山尾玉藻推薦

藤原冬人

夕虹や秩父連山ずぶ濡れに
十葉に月上りある帰郷かな
波音の迫り来ると大夕立
娘の泪乾きし朝のプチトマト

奥田順子

啼きごゑの鶉籠の方へ白日傘
峰雲やかひなに残るやけど痕
雲の上に雲湧いてをり冷し馬
凌霄花や門扉大きく開いてをり

助口弘子

ひと杓の水に出できし地蔵の蚊
炎天や堂島川の大曲り
裸灯に返る夜店の金魚かな
雲の峰まほるばの空ほしいまま

村上留美子

日焼子の抱きついてゐる神の杉
内宮の片蔭をゆくベビーカー
夏の夜の潮騒届く天文館
浜木綿や真珠の島の暮れ残る

垣岡暎子

手をとられ祭の端を急ぎけり
手にのせて空蟬に影生まれけり
水たまりにはじけ御輿の祭足袋
いとこらの去んでしまひし蚊遣香

伊勢きみこ

大川を流れゆく燈や祭あと
熱帯魚見入る幼の眼にちから
雷や犬はひらたく伏しぬたる
昼と夜の模様のちがふ宿浴衣

高橋芳子

夕立きて宝湯の声華やげり
杉山を鳥の引きゆく夕立かな
三伏や赤子のやうに鴉鳴く
いづこより木鋏の音の涼しかり